

ちゅんちゅん新聞

6月24日
土曜日

優生保護法 問題

—おかしなこと その①—

「優生保護法」この言葉の違和感

私はこの「優生保護法」という文字を初めて見たとき、違和感を持ちました。なぜなら、漢字を見ると「優しく生きる。それを保

護する法律」と書いてあるからです。でも実際は、強制不妊手術をして被害をもたらしました。だから、「こんな、優しくなんかない！保護なんかしていない！」と思ったのです。

その後、調べてみると、「優生」とは、子孫を優れたものにして、そうでないものを排除するという意味でした。それを知って、今度は、「障害のある人がいたって別にいいじゃないか」と思いました。そうすると、どうしてそんなことを決めた法律があるのかと、この法律のことが、ますますわからなくなりました。

「障害」といわれているものも、その人の特徴でしかないのに、「視力が弱い、耳が聞こえない、これは障害だ」そんなことを言ったら、書くのが苦手な人も、走るのが苦手な人も、みんな障害で、人間はみんな、障害者になってしまいます。そうしたら、子どもを産んでいい人は誰で、子どもを産んではいけない人は誰なのでしょう。それを決める人は、苦手なことが何もない完璧な人なのでしょう。

—おかしなこと その②— 国の役目は「国民を幸せにする」ことなのに

国の役目とは、なんでしょう。それは「国民を幸せにする」ことではないでしょうか。国民同士で争わないように、国民が不幸にならないように、みんなが守るべきルール「法律」を作ります。このように、本当なら国民のためを考えて作られるはずの法律ですが、「優生保護法」という法律には苦しんでいる人たちがいます。

もちろん、人は間違ってしまうことはあります。でも、間違いに気づいたら、私たちは、傷つけたり、苦しめたり、被害を与えてしまった人に対して謝ります。しかし、国は間違いに気づいて、正した今も、この法律によって苦しめられた人たちに対して、謝っていません。

ちゅんちゅんです！

「優生保護法」とは？

1948年(昭和23年)から1996年(平成8年)まで存在した法律です。

この法律により、障害のある人たちに、子どもが生めないようにする手術「強制不妊手術」が行われました。



私は去年の10月に、東京で行われた「優生保護問題の全面解決を目指す10.25全国集会」に参加しました。でも、そのことを今まで新聞に書いていませんでした。それは、「おかしなこと その①、②」で書いたようなことが引っ掛かって、この法律について、よくわからなかったのです。わからないので書けないと思っていました。そして、それは自分が世の中について、あまり理解していないから、わからないのだと思っていました。しかし、この法律には、色々とおかしいところがあったので、私は腑に落ちていなかったのです。

街頭宣伝への参加

5月23日、名古屋市 金山総合駅で、原告の方々とその支援者の方々と一緒に、街頭宣伝を行いました。

この目的は、被害を受けた方々が、差別のない社会にしたいと裁判に臨んだ思いを知ってもらうことと、この問題を一人でも多くの人に知ってもらうことです。



当日、原告の一人の方に会うことができました(お名前は伏せます)。その方は、私に手話で「ありがとう」と言ってくれました。手話を使っていたので、「あっ、耳が聞こえないんだな」と思いました。

目が見えない、耳が聞こえない、歩けないといったことも特徴でしかないのに、こんな法律まで作られたことは、衝撃でした。さらに、私がこの法律に対して、ずっとモヤモヤしていた原因にも気づきました。私は今までずっと、自分が暮らしている場所は、みんなが大事にされていて、居心地がいいと思っていました。普段から、私はみんなに優しくしてもらって、それが「あたりまえ」になっていたのです。でも、この法律の被害を受けた方々にはその「あたりまえ」がなかったのです。

原告側の弁護士に聞きました Q & A

この裁判の原告側の弁護団の弁護士「櫻井 義也」さんにお話を聞きました。

Q. 原告側の弁護士として、やりがいのあることは？

A. 愛知の裁判の弁護団には10人の弁護士がいますが、それだけでなく、障害者団体の方など、原告の方を支援する方々がたくさんいます。全国にも、たくさんの弁護団の弁護士や支援者の方々がいます。みんなで思いを共通にして活動することには、やりがいがあります。

Q. 弁護団になって、新たに知ったことは？

A. 実際に被害にあわれた方に直接お会いすることができ、とてもつらい思いをされてきたお話を聞くことができました。直接その体験を聞くことで、被害のひどさを感じることができました。「幸せな、当たり前の暮らしがしたかった」という原告の方の言葉は、重く心に響きました。

Q. どうなってほしいですか？

A. 現在、優生保護法による被害の救済を裁判所に訴えた原告の方は全国で38人ですが、被害を受けた方は、国の発表だけでも約2万5000人います。裁判をしている人だけでなく、すべての被害者が救済されてほしいと思います。被害を受けた方々の多くは高齢となり、裁判の途中で亡くなった方もいます(どんな思いで亡くなっていったか、想像してみてください)。国は現在でも、裁判で責任を認めようとしません。早く責任を認めてほしいです。

また、国は多くの方に強制的な手術をしてきただけでなく、学校の教科書に「素質の劣悪な人々に対しては、出産を禁止することが望ましい」などと書いたりして、長い間、差別的な考えを国民に広めてきました。今でも、障害のある人に対する差別的な考えはなくなっていない。世の中の人がこの問題を正しく知り、真剣に考えることを通して、差別のない社会になってほしいと思います。



ちゅんちゅんです！

この法律は、平成8年まで存在していました。平成8年、というと、私のパパが17歳(高校三年生)の時です。だから、もしパパがなにかの障害を持っていたとしたら、この法律の被害(強制不妊手術)にあっていたかもしれません。そうしたら、私は生まれていません。考えてみると、すごく身近な法律だな、と思いました。

世界最小の鳥

世界には、たくさんの鳥たちがいます。その中には、全長約5センチメートル、体重2グラムほどの世界最小の鳥もいます。その鳥の名前は、「マメハチドリ」。マメハチドリは、1秒に80回も、はばたき、ホバリングをしながら花の蜜を吸います。ホバリングにはたくさんのエネルギーを使うので、頻繁に食事をしなければなりません。

また、マメハチドリは、光を反射することにより、見る角度によって、羽の色が違うように見えます。私もいつか、マメハチドリに会ってみたいです。



浮き草の上を歩くことができる鳥

アフリカレンカクは、浮き草の上を歩くことができます。べつに体重が少ないわけではなく、あし指がとても長いことにより、体重を分散させ、浮き草の上を、沈まずに歩くことができるのです。

敵に気づけば、クチバンと鼻の穴だけを水面に出し、水中に隠れることがあります。また、ワニなどの敵に出くわしたときは、お腹の羽毛に雛たちを隠し、逃げることもあるといます。

「ゆるゆる怪鳥図鑑」かげ、Gakken より

連載 昔話

「雀コの米作り」

ちゅんちゅん・作/絵

むかしあったずもな。

あるところに、じいさまとばあさまがありました。じいさまは年をとっているもんだから、仕事ができねえし、ばあさまも腰が曲がっちゃる。それにじいさまとばあさまには子どもがねえから、代わりに仕事をしてくれる人もいなかった。それで、じいさまとばあさまは、なんとか蓄えで飯を食っておった。しかし、だんだん、その蓄えも少なくなってきた。じいさまとばあさまは、

「はて、なによにしたらいいかの。」

と困り果ててしもうた。

あくる日、もうすぐおてんとさまがしずむというとき、ばあさまが田んぼに行ってみると、スクラ、スクラと小さな泣き声が聞こえてきた。ばあさまが泣き声のほうへ行ってみると、一羽の雀コが泣いていた。ばあさまはおどろいて、

「そこん、雀コ、なして泣いとるんじゃ。」

と声をかけた。すると雀コは、

「おらが住んでた田んぼの、たいそう意地の悪い主人が、『おめえは米を食べるから』と言って、おらをくわで叩いてきた。だから、おらは命から逃げてきただよ。今も、もしかしたらおらを追っつきちよるかもしれん。」

と話した。ばあさまは気の毒に思っ、

「おらんとこには米もないが、もうすぐ

おてんとさまがしずむだから、おらの家に

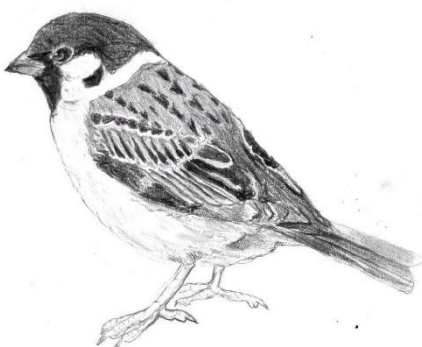
一晚、とめてやるけ。」

と言った。雀コは喜んで、

「嬉しいことじゃ。」

とばあさまの家へあがった。

つづく



紹介します！

～オススメの本～

今回のオススメの本は

「アレックスと私」

(アイリーン・M・ペーパーバーグ)

私は鳥が好きです。前は日本の野鳥が好きでしたが、最近ではインコにも興味を持ち始めています。インコの中でも、特に私が魅せられたのは「ヨウム」。言葉の発音が上手く、とても賢いからです。

そんなとき出会ったのが、この「アレックスと私」。この本により、天才ヨウム「アレックス」のことを知りました。

この本は、グレーの羽に覆われ、真っ赤な美しい尾羽の持ち主であるヨウムの「アレックス」とアイリーン・M・ペーパーバーグ博士の1羽と1人が切り開く、感動の実話です。

クルミの大きさほどの脳みそでこれほど多くのことを考え、言葉にできるのには、とても驚き、感動しました。

アレックスの成長を追っていると、とてもワクワクします。まるで人間の子どものようだからです。

ママに、アレックスの笑えるエピソードの一つを話すと、「・・・ちゅんちゅんも同じようなことを言っていたよ。」と言われてしまいました。

アレックスは成長していくごとに、強情で、威張るようになりました。「自分が誰よりも偉い」ということを、ペーパーバーグ博士やお手伝いをしてきている学生に伝えようとして、威張っている様子は、思わずクスッと笑ってしまいました。

私が特に感動したのは、アレックスの最後の言葉です。それは、「イイコデネ、アイ・ラブ・ユー」。ペーパーバーグ博士は、アレックスが死んだことを知って、愕然として、とてもショックだったそうです。アレックスが、ただ死んでしまっただけでも十分ショックだったと思いますが、アレックスはヨウムの平均寿命より20年も早く、わずか31歳ほどで死んでしまったので、ペーパーバーグ博士のショックは、とても大きかったことでしょう。わたしも、アレックスはすでにこの世を去っていると知っていながらも、何だかショックでした。この感動シーンの後にも、第9章の「彼が教えてくれたこと」など、まだ続いていましたが、この感動シーンを読んでからだと、「満足した」のか、読む気がなくなってしまいました。それほどまでに、このシーンは感動したのです。

アレックスは私が生まれる前に亡くなってしまっているし、日本にも住んでいませんでしたが、なぜかとても身近に感じました。それは、私たち人間の子どものように無邪気で、笑える場面があったからだと思います。この本を読んで、感動しない人はいない、と言っても良いでしょう。

